

書 評

濱里 忠宜 著

人間論集『斜光の風景』（高城書房 平成21年3月刊 258頁）

松 井 春 満

近年は大学の専攻名から哲学の文字が殆ど消えてしまった。哲学といえば難解で、実生活からかけ離れた無用の学乃至は空理の学のように見なされ、これを専攻しようとする学生が稀になってきたのである。経済を中心とする功利主義が席卷する時代の故であろうが、また哲学界自身にも原因がなくはない。「誰々における何々の問題」といった類いの、狭い問題での個別科学の方法に似た文献実証主義的な研究が多い現状に、学生は魅力を感じなくなっている。「思想」や「理想」の哲学誌には、自らの立論の根拠に批判吟味を加えつつ、時代を、人間を、自己を見据えてその本質を解明する、真の哲学と呼びうる議論が稀に登場するが、やはり難解であることは免れず、専門家以外の学徒の関心をよぶことはまず困難な状況にある。

そういう中に著された濱里の本書は、認識論、存在論あるいは形而上学そのものの問題に光を当てて体系化し、敢えて哲学の本道を行こうとする議論の書ではない。しかし一つの間人認識に立った、文字通り「人間論」として著者の視角を明確にして、人間の生き方の真実に触れようとする立論であり、それを具体的な生のありようと共に展開しているので、若干の繰り返しはあるが、若い学徒の心を惹きつけるに違いない生きた哲学の書になっていると言えるように思う。全篇は「人間の哀しみ」「逆説と道化」「幻の人間論」「わが写経人たち」と題する4章に分けられているが、それぞれ含蓄豊かでありつつも、論じられる主旨に一貫したものがあるので、ここでは章別ではなく、本書の全体からその特徴点を汲み取ってみたい。最初に著者の来歴に触れておくのが本書の理解に

資することになるであろう。

京都大学文学部哲学科の哲学専攻（いわゆる純哲）⁽¹⁾を卒えて以来、濱里は郷里の鹿兒島県へ帰って、高等学校の教員を勤め、後には学校長にもなり、また教育行政機関にも身をおいて県教育長の任につくなど、ひたすら教育界に挺身してきたことはよく知られていると思う。またその間に、読む人を感動させずにはいない幾冊もの教育随想を著してきたことを知る人も多いであろう。その何れの書物も、濱里の実体験に裏付けを持ち、その中から泉のように湧き出る、人間について、人生について、青春について、教育について、等の著者自らの思索と逍遙を述べたものである。その体験的思索がまた、単なる体験談に留まるのではなく、古今東西の思想、文化、生活等々についての広い識見を浸透させつつ潤いのある言葉で語られているので、濱里の書は、自己の生き方を真摯に模索しようとする若者の心にしみとおっていく力をもつてきた。そこには豊かな人間愛の精神が香り、勿論、もはや若者ではない大人の心をも捉えてやまぬ名著群である。それゆえに筆者（私）は、これらの労作を、期せずして人間の育成に寄与するという意味で「教育随想」と呼び、「教養の書」とも呼んできた。

(1)

前置きが長くなったが、今回の新著『斜光の風景』も、濱里のこのような「教育随想」の延長線上に位置付けられてもよい書物ではある。しかし従来の著作にも勝って、著者自身の論理をより明確に立て、さらに人間に関わる視野をより大きく広げたという点で、新機軸を打ち出した労作と評価することが出来る。その論理とは、後述する、人間のまた人生の真実（虚に対する）に触れる「中庸」の論理であり、拡大された視野とは、表題にある「斜光」の翳りの中に浮かび上がるものを見るという視野のことである。それではまず後者から瞥見していきたい。

一ものでも、ことでも、ひとでも、本当の姿というものは、正面から見るだけでは見えない点、わからない点があるものだ。見方を少しずら

⁽¹⁾当時京大哲学科には、哲学、西洋哲学史、中国哲学史、印度哲学史、宗教学、倫理学等々10余の専攻があったが、そのうち「哲学専攻」は通常このような呼び方をされた。

してみよう、斜めからの光をそれに当ててみよう。すると影が見え、その翳りの中に浮かび上がってくるものがある。その姿にも目をとめてみよう。平面的にはなく、立体的に対象の姿が見えてくるだろう。丁度、楕円が二つの焦点から成り立つように、一つの目だけでなく、複眼で見ることによって初めて形を結ぶ世界というものがあるのだ。

これは瀧里の言葉の趣旨のままに筆者が表現し直してみたものだが、著者が「斜光の風景」と語るのは、このような見方で目に映ってくる世界の姿なのである。こういう見方をしてみると、私たちが平素いかにものごとを一面的に、また単純に認識し、判断していたかがわかってくるだろう。事柄に対して本当に「思慮深く」あるというのは、このような斜光の中に浮かび上がるものをも捉え、自己の情念を抑制して、柔軟に対象を理解しようとするところに成り立つと著者は言いたいのである。著者の説くその例の幾つかをまず次にあげてみよう。

例えば五木寛之は、「惑うというのは、人間に与えられたすぐれた能力の一つだ」と述べているという。瀧里はこれに共感しつつ、次のように考える。今まで見えなかったものが見えるが故に惑いや迷いが起こるのであり、そこには哀しみを伴う矛盾が孕まれている。そして迷いは煩惱と仏教では言い、煩惱を滅却した悟りの世界を菩提と言うが、煩惱があるから悟りの世界が求められるのであり、また悟りへの希求に照らし煩惱が煩惱であることが解る。この二つの世界はその矛盾において存在する。それゆえに「煩惱即菩提」とも言われうるのであろう。仏教はまさに、人間を斜光の翳りの中に照らし出す宗教であると言うことが出来る。また、作家の椋鳩十や太宰治を例に上げ、この人たちが演じ、描く「道化」には、不まじめを演じ描きつつ実はまじめな姿、稚気を演じる大人の成熟した姿が見えるのだという。そこに人間の多重性を受容する人間の優しさが流れていると瀧里は見ている。

もう一つ例を上げれば、もし人が何かに失敗や挫折をして、人から遅れをとったような場合に、決して悲観することはない。遅れて回り道をすることによって、却って見えてくる人生の風景というものがある。それは人生にとってきっとプラスに働くものなのだ、と瀧里は確信をもって語りかける。学生時代に病臥して二年に余る休学を余儀なくした筆者なども、まことこの言葉の通りだと思ふのであるが、このようにして複

眼なればこそ捉えうる人生の真実を、本書は他にも多様な例をあげて考察していく。

次に、著者が挺身してきた教育の世界に目を注いだ例を一つ二つあげてみよう。例えば、ある学校長の姿を紹介しつつ、校長の責務について語っている。校長というものは、一人一人の教師を音楽の演奏者として、そのよき調べを引きだし、それに統一を与えるオーケストラの指揮者のようなもの、それは決して画一の管理であってはならない。教師を生かすことが校長の仕事である。それが出来る校長は複眼の持ち主とってよいのである。

また教師にとって大事なものは、子供の姿が本当に見えているということ。出来ない子供があっても、その気持ちが理解できるようでなければならぬ。それが薄れるときは「教師としての危機」にある。濱里自身の体験の裏付けをもって語られる、このような斜光の視野をもつ教師像は、競争社会の厳しい要求が先行しがちな今日の教師の胸に痛く響いてくるものがあると思われる。と同時に筆者は、このような言葉が元県教育長の要職にあった人から語られていることに、驚きと喜びを覚える。日本の学校が上意下達の統制管理の機関に変容してしまったかのように伝えられているのには誤解がある。このような教育長が存在する限り、学校は人間が育ちゆく場であり続けるだろう。私たち自身も、複眼で学校教育を捉えることが必要であると考えさせられたのである。

(2)

フランスのモラリストと呼ばれる哲学者たちがいる。近代の前半期の16世紀から18世紀にかけて、一見シニカルな表現で人生知や世間知を論じた人たちである。濱里は、中でもラ・ロシュフコーやジューベールの言説にかねてより心ひかれる所があり、本書でもかなりの頁を、この人たちの思索の紹介と検討に割いているのであるが、いずれも斜光を透かし見ることによって、人間性の真実を露にしようとした人たちであった。

濱里によれば、例えばラ・ロシュフコーは、斜光の翳りに浮き上がる人間の素顔に「自己愛」の姿を見、美德と呼ばれるものの多くはその仮面にすぎないことを看破したという。とすると人間はまことに哀しい存

と見えるが、しかしだからこそ、この自己愛を陰画として、真の美徳が何であるのかも解るようになる。実はその矛盾を生きようとするのが人間らしい人間ということなのである。

通常のもラリストの範疇から逸れるようだが、哲学的に見て興味ある指摘は、濱里が、ある識者の説を紹介しつつ、あのドイツ近代哲学の泰斗であるカントにも、フランス・モラリストに比肩しうる側面があると見ていることである。この見解には、同じくカント研究者と自認する筆者も全く同感であることを表明したい。普通には、その著『道徳形而上学原論』と『実践理性批判』において道徳法則を見出したカントは、意志決定の当為（Sollen）を説いた厳肅主義（Rigorismus）の道徳論者と見られ、終生独身で、時計のように決まった時刻に散歩をしたなどの逸話の増幅作用もあって、典型的な道学者のように誤解されている。しかしカント研究において重きを置かれる所謂三批判書以外の論説、例えば『宗教論』『人間論』『教育論』『伝記』などを読めば、カントが人間の抜き難い根元悪を哀しみ、善悪の間を漂う人間の心と行為を理解し、社交的な世間知をも説いて、時の社交界の婦人たちの敬愛の的となった紳士であったことが解る。厳肅主義の道徳説は、真正面から道徳を論理的に究めて表現した理念として説かれたものであり、その理念通りには生きられぬ人間の哀しみを見つめる目が、カントには同時に開かれていた。その弱さの故に高き理念は輝きを見せる。カントも昼の光と斜めの光の双方から人間を捉えることによって、その哲学は人間学の体系となりえたのである。そしてまたカント哲学をこのように理解するのも、通説と異なって、複眼をカントに注ぐことから見出されるものと言ってよいのである。

(3)

このような斜光観を提起する濱里の思索を貫く論理は、かつてアリストテレスが説き、また孔子が説く「中庸」をもって徳とする論理である。「中庸」とは何事でも程々の真ん中を取ることではない。質の比較吟味の上で最高の価値として選ばれる中位のことである。それゆえにその選択には熟練を要する難しさが伴う。徳とは叡知の裏付けをもつ倫理的質のことであるが、その中庸の一例をあげれば、アリストテレスに

あつては、例えば、情念の行き過ぎである「激怒」と、それが著しく欠如した「無気力」との中位にある「穏和」がその徳である。その場合、その穏和は情念の制御を通してはじめて可能となる。中国の孔子の場合もこれと殆ど見解を同じくし、思慮の過不足なき中庸として「熟慮」を徳と見ている。瀨里によれば、フランス・モラリストのラ・ロシュフコーにもこれと質を同じくする見解があるという。例えば彼は、人間の素顔には「自己愛」が潜むことを複眼をもって洞察したのであるが、そのため、友情を「われわれが常に何かを得ようとしている取引にすぎない」と冷たく言明するに至る一方で、にも拘わらず、「友を疑うのは友に欺かれるよりも恥ずかしいことだ」と語る。この言葉の矛盾を、瀨里は「私にとってのよき友は、＜わが友＞という言葉で呼ばれるようなよき友」のことであり、それも「自己愛」の系に属するには違いないが、そういう友をもつのは「ただ一度の人生をいっそう味わい深くしてくれるめぐり逢いなのである」とラ・ロシュフコーは言いたいのだと読み解いている。この明哲なフランス・モラリストが、友情を「自己愛」に由来すると看破しつつも、極論を排した「中庸」の位置に真実を見る目がそこに働いている、と瀨里は見ているのである。

このような中庸の論理に立つ典型的な見解を述べた書として、瀨里は、今一つ16世紀の明時代の儒者洪自誠なる人の『菜根譚』という人生論的随想集をあげ、その一群の言葉を次のような平易な表現に翻訳している。

静かな人は、雲や石を見て神秘をさとる。ハデな人は、歌や踊りを見て夢中になる。だが心得た人は、さわがず沈まず、目立たず干からびず、いつも自由の天地を行く

人のため骨を折っても氣にとめず、メイワクかけたら忘れるな。人から受けた恩は忘れず、うらみはかならず忘れてしまえ

人を責めるにも、度をすごすな。人がそれに耐え、受け入れられるように配慮せよ。人に教え、すすめるも、程度がある。人がよく解り、ついてこられるようにするがよい

これらの語録に何われるのは、人のあやまちに対する温かいまなざしであり、それは世間での共生の、熟成した実践知を描いたものである。それを瀧里は「中庸の美学」とも「慎みの美学」とも呼び「東洋の倫理」と言ってもよいものかもしれないと見ている。処世術としては、斯く他者の立場に立つことが、畢竟自己に帰ってくることを知っている故の立言であると考えられるというのである。今、中庸の徳の論者としてアリストテレス、ラ・ロシュフコー、孔子、洪自誠の名をあげたが、このように東西の思想に視野を広げ、そこに共通するもの乃至は相似るものを見出そうとするのが、また本書の特徴であると言うことができる。

(4)

瀧里は俳句を嗜む人である。自分では謙遜しているが、作ることはもとより、その鑑賞と鑑識の目も相当の水準である。その瀧里が、世界一短い詩文学といわれる俳句を分析して、これを哲学的時間論の問題として考察し、かつ上記の斜光論、中庸論と絡めて論じているのは、本書のまことにユニークな特徴である。筆者も短歌の世界に身をおいているので、それなりに解るのであるが、本書のような議論は、まこと俳句のことを相当理解していなければ叶わぬ議論である。

瀧里は「俳句」の世界には「言い知れぬ矛盾の詩情」があると言う。僅か十七音で表す対象と心意の世界。その一句全体の響きと、句の中の「切れ字」のもつ絶妙の働きをもとり上げて、それは「ものを凝視して、その一瞬のいのちの真実を写し取る」世界であると言う。しかも「その一瞬のために、言葉を削り落とせば落とすほど、詩情を燃焼させ真実が露になってくるという不思議」がそこにある。省略することによって却って満たされるという矛盾の世界とあってよい。言葉にならないもの、表現されていないものが句を生かしているのである。

芸術がもつこのような質は、昔の「伝統的日本画」の画面にも見られると筆者は思う。油絵的畫面とは異なって、描かれざる空白も微妙な響きを奏でている。同じことはまた、日本や中国に共有される「書芸術」の世界にも存在する。墨痕のみでなく、紙面で筆の触れぬ空白が、揮毫される文字のいのちをさえ左右するのである。

こう考えると、瀧里の「俳句」の世界の分析は、東洋の芸術に共通す

る精神の特徴、東洋的斜光の世界の特質論に広がっていく可能性をもつ。その仕事も今後果たしてほしいと思うのであるが、ここでは瀧里は、これをハイデッガーの「時間論」と関係づけて考察するのである。これがまたユニークで鋭い分析である。

俳句と斜光とハイデッガーという独特の取り合わせ。浅学な私であるが、このような考察に接するのは初めてで、まことに多々啓発されるものがあった。

例えば、日野草城の生の終焉に近き頃の次の句をとりあげている。

風立ちぬ深き睡りの息づかい

これは臨終間近の人の深い時の刻み、時の熟成を伝える句であると瀧里は言う。時の一瞬一瞬に時間が凝縮しているのである。この「息づかい」には、単に時が経っていくのではなく、死と向かい合っている人の時の刻みがある。その時間は、日常の客観的に流れる時間ではなく、人間の生の深みに覚える時間、ハイデッガーの言う「根源的時間」である。終末の死を先駆的に覚悟したものが、同時に生へ回帰する。その一刻一刻において死と生、終わりと始まり、喪失と生誕が同時の一体的である時が現象している。このような時の在り方をハイデッガーは「時熟する(sich zeitigen)」と呼ぶ。ハイデッガーの時間論の根本問題であるが、時間は、通常の意味のように過去から未来へ向けて流れるのではなく、関心(sorge)によって構成される実存的時として生起するのである。草城の句では、上に述べたように、相矛盾する時が刻々に一体となって盈ちつつ動いている。このような矛盾の自己同一的な時間を、短詩型文学の俳句は自己の世界となしえていると瀧里は見るのである。その意味で俳句は、まさに斜光の中に浮かび上がる詩文学である。

ここではまた、皮膚癌の手術を繰り返した後亡くなった宗教学者岸本英夫の晩年の心境にも触れられている。宗教学者でありながら氏は遂に「信仰」の世界には入れない人であった。その岸本が最晩年に至った時、「人生は別れの連続である。そして死はもはや別れの訪れないく永遠の別れ」と思ったとき、氏はこの生きている<今>を、ただ生きるのではなく味わって生きたいという思いが湧いてきた」と語ったと言

う。濱里は岸本のこの言葉を、「一瞬一瞬が別れであり、同時に出会いなのである。その出会いと別れを味わって生きたいと言っているのである」と受け止めている。この岸本の晩年の心もまた、人生の斜光的な複眼の味わいと言ってよいのであろう。

濱里が本書で取り上げている事例と局面はまだまだ多岐にわたるのであるが、紙幅上、限られたもののみ絞らざるをえなかった。それにしても、「斜光」という主題に沿って人間の生を見つめ語る濱里の思索の展開は、われわれの生き方をしみじみと顧みさせるものであり、他の「教育随想」と同じく、深い感動を覚えずにはいられない。本稿による本書の紹介が、その感銘を損なわせたのではないかと案じるものである。一言敢えて欲を述べれば、斜光と中庸の徳との関係を、さらに論理的にほぐしてほしかったという思いは残る。しかし感覚的には十分触れられているのである。

最後に濱里自身の纏めの言葉を記しておきたい。

ものの姿はわれわれがどこに立っているかでその姿を変える。どの方向から光が当たっているかで表情を変える。人間もまた同様であらう。この小論集は、いわばこの矛盾にみちた人間の〈ありよう〉(存在)を探るその視座についての私の想念をまとめたものであり、さまざまな視座に立った人間素描とも言えるものである。

(奈良女子大学名誉教授)